腐敗

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
腐敗

【Ｎコード】
Ｎ５０４７Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
朝売新聞社長井上恒雄はマスコミの権力をかさにやりたい放題を重ねていた。しかしネットの普及でそれが止まり転落がはじまった。我が国のマスメディアの腐敗を書いた作品です。

第一章

腐敗

朝売新聞社は日本で最も売れている新聞社である。

『発行部数世界一』

これがこの新聞の謳い文句だった。このことを誇りとさえしていた。

新聞は出せば売れ金は無尽蔵に入ってきていた。政治家も官僚もこの新聞に悪く書かれればそれで終わりだった。世論に袋叩きにあうのだった。

「厚生大臣汚職か！？」

例えばこう書かれる。事実がどうであっても。すると世論はこの大臣を批判し糾弾するというわけだ。

「辞めろ！」

「逮捕されろ！」

罵声がその大臣に殺到する。これは官僚でも同じであり若しこの新聞に睨まれたならばそれで終わりであった。その省庁ごと書かれるのだった。

「財務省の末路」

「最早解体すべき」

するとまたこの新聞を読んだ国民が激怒し糾弾する。それを受けて検察等も動きこの省庁は完全に権威を失う。事実で糾弾される場合もあれば捏造される場合もあった。

だが国民は新聞が嘘を言うとは思っていなかった。だからこそ朝売新聞は正義であったのだ。

「新聞は正しい」

「新聞は正義だ」

誰もがそう思っていた。そしてその社長も同じであった。

井上恒雄。剣呑な目の光を放ちさながら魔女の様な顔をしたこの

男は見事なスーツを着ていて葉巻を愛していた。彼はいつも言うのだった。
「政治家も官僚も新聞には逆らえないんだよ」
自分のその豪奢な机にふんぞり返っての言葉である。
「何かあったらな、叩け」
さながらヤクザ屋の如き言い草であった。
「何でもいいからな、叩け。いいな」
こうして己の意にそぐわない者を次々と叩いていった。彼はそれを『筆誅』と呼んでいた。
その『筆誅』により多くの政治家、官僚が失脚した。そしてそれは政界や官界に留まらず財界にまで及んだ。井上はこう称するのだった。
「企業家は政治家や官僚と完全に癒着している」
「はい、そうです」
「その通りです」
すぐに彼の取り巻き達が諂いの言葉を述べる。
「全く以って許し難いことです」
「成敗せねばなりません」
「どんな些細な不正も見逃すな」
井上はこう取り巻き達に命じた。
「いいな、なければな」
「ない場合は」
「いつものようにですね」
「そうだ。創れ」
不正の記事を創れというのだ。これは捏造以外の何者でもない。あえてそれをして企業家達を攻撃しろと。はっきりと命じたのである。
「不正を創れ。いいな」
「はい、わかりました」
「そのように」

取り巻き達は彼のその言葉に頷くばかりだ。だが社内にはその彼のこの捏造の指示に対して流石に意を唱える者もいた。
「社長、それは幾ら何でも」
「何か言いたいことはあるのか？」
「あります」
彼は毅然として井上に言うのだった。豪奢な、机だけでどれだけの金がかかっているのかわからないその社長室の中において。彼は言うのだった。
「捏造をするなどとは」
「筆誅を加えるだけだ」
井上はその彼に対して平然と返した。葉巻を傲慢な態度で吸いながら。
「それだけだが文句あるのか」
「ですから捏造ではないですか」
彼は必死の顔でまた井上に告げたのだった。
「それは」
「捏造？それがどうした」
井上は傲岸そのものであった。
「俺達はな。世論を報道するんじゃない」
「報道するのではない！？」
「世論を創るんだ」
そうだと言うのである。報道するのではなく創るのだと。こう言い切ったのだ。
「マスコミはな。この世で一番偉いんだぞ」
「権力者だというんですか」
「そうだ。そして俺達は常に正しい」
あまりにも傲慢な言葉はなおも続く。
「何をしても許されるんだよ」
「それは権力者だからですか」
「そうだ」

だからだというのである。

第二章

「その俺達に楯突くような連中はな。何をしてもだ」
「捏造をしてもですか」
「潰すんだよ」
やはりヤクザそのものの言葉であった。極めて質の悪い人間の言葉である。
「完全にな」
「それじゃあ本当に捏造を」
「おい、話はもう終わりだ」
井上は彼の話をここで切らせた。
「もう帰れ」
「いえ、捏造だけはしては」
「御前は懲戒免職だ」
こうまで彼に言うのだった。
「いいな。会社の金を横領しやがって」
「えっ、私はそんなことは」
「今から警察に言っておくからな」
有無を言わさぬ口調だった。
「警察のトップも俺には逆らえないってこと。覚えておけよ」
「くっ・・・・・・」
「それが嫌ならさっさとこの部屋から出て行け」
不遜な態度であった。相変わらず。
「さもないと本当にクビじゃ済まねえぞ」
「・・・・・・わかりました」
彼は無念さと苦渋に満ちた顔で言うしかなかった。
「私はもうこの社を去りましょう」
「おう、さっさと出て行け」
「ですが」

だがそれでもだった。彼は井上に対して言った。言わずにはいられなかった。
「社長、権力というおのは所詮は砂上の楼閣です」
「マスコミは情報も金も何もかも持ってるんだぞ」
井上は葉巻を吸いながら彼に返した。
「それでどうやって俺達の権力が砂上の楼閣なんだ」
「そう言って権力の座が崩壊するのも人の世界です」
「根拠はないな」
「あります」
井上を睨み据えての言葉だった。
「貴方は何時かそれを思い知るでしょう」
最後にこう言って姿を消すのだった。井上は彼の言葉を聞いていたがその言葉に対して平然とこう述べて終わるのであった。
「誰がマスコミの権力を崩すっていうんだ。できるものかよ」
それからもこの新聞社の虚報は続いた。しかも意図的な。まさに彼等は世論を作りそれによりやりたい放題を行ってきた。それはスポーツ界にも及んでいた。
「いいか、金はあるんだ」
井上はまた取り巻き達に告げていた。
「ホームラン打つ奴と速いボール投げる奴はだ」
「その金で、ですね」
「掠め取るんですね」
「そうだ。金で動かない奴はいないんだよ」
井上の考えではそうなのだった。
「だからだ。目の前で金を積んでな」
「ええ、それで」
「その選手を取っていくのですね」
「強ければそれで客も来るんだよ」
こうも考えているのだった。
「それで新聞で宣伝してだ。いいな」

「わかりました。そのうえで」
「我がチームを強くしていきましょう」
取り巻き達は諂いしかしない。彼等は井上の言葉通りに他のチームのスラッガーやピッチャーの前の大金を積んだ。多くの者が札束に目が眩みそのチームに入った。
まさにチームはスター集団になった。しかしその人気は。
「あまり客が増えていないだと」
「はい、どうも」
「あまり」
取り巻き達は浮かない顔で彼に述べるのだった。
「どういうわけか」
「増えていません」
「どういうことなんだ、それは」
井上はそれを聞いて怪訝な顔になった。
「スターばかり揃えたのに何で客が増えないんだ」
「私にはわかりません」
「私にもです」
取り巻き達は困惑した顔で答えるだけだった。誰も答えられなかった。
「しかもチームも思うように勝てませんし」
「何故でしょうか」
「糞っ、こうなったらだ」
井上は忌々しげな顔で命じるのだった。

第三章

「もっと選手を集めろ」
「もっとですか」
「そうだ。金は腐る程ある」
顔を真っ赤にしての言葉だった。
「どんな手段を取ってもいい。掻き集めるんだ」
「選手をですね」
「ホームラン打てるバッターとエースばかりをな」
集めろと命じるのだった。
「わかったな。じゃあすぐにやれ」
「ルールに違反する場合は」
「コミッショナーや他のオーナーの懐に金を入れろ」
賄賂ということだった。
「いつも通りにな。額を増やしてだ」
「はい、それでは」
「その様に」
「とにかく手段を選ぶな」
井上は言い続ける。
「何としても常勝軍団にしろ。いいな」
「勿論です」
「そういえば文句を言うチームもありますが」
取り巻きの一人がふと言った。
「賄賂も受け取らないで」
「そういう場合はスキャンダルをでっちあげろ」
何処までも事実を捻じ曲げても平然としているのだった。
「いいな」
「そうですね。いざとなれば新リーグ設立ですね」
「若しくはチームを潰していって一リーグですか」

「とにかく手段は選ぶな」
彼はそれを全く選ばないのだった。こうしてスポーツの世界でもやりたい放題を続けていた。しかしここで思わぬ敵が現われたのだった。
井上のスポーツ界での横暴に。ネットで次第に批判があがったのだ。
「イネツネやり過ぎだ」
「っていうかいい加減にしろ」
こうした批判があがりだしたのだ。
「何でも誰でも金積んでな」
「しかも何かあったら新リーグだ」
「コミッショナーは何しているんだ」
「イネツネの傀儡だろ。お飾りだよ」
イネツネとは井上の仇名だ。井上の名字と恒雄という名前から取られたものである。
「いないのと一緒だよ」
「それでイネツネがあんなにやりたい放題やってるのかよ」
「そうだろ？マスコミなのに全然正義じゃねえよな」
「いや、マスコミだからだろ」
こうした意見も出て来た。
「マスコミのトップだからあそこまでやりたい放題できるんだろ」
「マスコミだからかよ」
「そうだよ。マスコミなんて嘘ばっかりだぜ」
そのことが指摘されだした。
「嘘書いてよ。実際あの朝売なんて今まで嘘ばっかりだぞ」
「まさか」
「新聞が嘘つくのか？」
この言葉に最初は多くの者が戸惑った。
「真実を報道するのがマスコミじゃないのか？」
「違うっていうのか？」

「違うんだよ、これが」
ここで多くの者の目にマスコミ、とりわけ朝売の今までの虚報が細かい検証も添えて出された。誰もがそれを見て唖然としたのだった。
「何だよ、これ」
「ここまで嘘ついていたのかよ」
「しかもこれってよ」
「意図的に工作してるよな」
「間違いない」
皆その数多くの虚報を見て唖然としていた。

第四章

「こんなにやっていたのかよ」
「信用できねえな」
「ここまで腐っていたのかよ」
「しかもあの新聞は井上が社長だからな」
　このことは誰もが知っていることだった。
「しかも代表取締役で主筆だ」
「じゃあ絶対者なんだな」
「誰も社内で逆らえないらしいぞ」
「そうだろうな」
　それは容易にわかることだった。
「あんだけ好き放題言ってやってるんだからな」
「周りにいるのは取り巻きのイエスマンばかりか」
　このことも察することができた。彼等は検証すればする程朝売、そして井上のとんでもなさを知った。やがてそれは一つの運動になっていった。
「もう朝売取るの止めるか」
「ああ、そうするか」
「そうした方がいいな」
「嘘ばっかりの新聞なんて読む価値がないからな」
　それぞれ言い合うのだった。
「よし、じゃあ俺読むの止めるな」
「俺は今までの朝売の嘘を検証したサイト立ち上げるな」
「俺はイネツネ批判するサイトだ」
　実際にそうしたサイトが次々に林立されたのだった。ネット中に瞬く間にできていく。
　それはただマスコミ関連だけでなくスポーツにも及んだ。最早ネット中に井上に対する批判が充満した。最早それは誰にも止められ

なかった。
ネットは携帯でも見られる。従ってそれこそ誰もが知ることになった。そうして朝売のチームの人気は暴落し球場ではブーイングが集中した。
「負けろ金満球団！」
「他のチームの選手を掠め取るだけか！」
とりわけ金で来た選手にはブーイングが殺到した。圧倒的なブーイングとパッシングにより選手達の士気は落ちその成績もまた同じだった。順位も落ち最早どうにもならないまでになっていた。
それは井上へのブーイングにもなった。オーナー席に入ればバッシングの垂れ幕があり彼の席にもブーイングが届いた。
「イネツネ消えろ！」
「球界から出て行け！」
「黙らせろ」
井上はその豪奢な席で葉巻を吸いながら忌々しげに言った。
「あの連中をな」
「はい」
取り巻き達が応える。しかし黙らせることなぞできなかった。彼等も紙面で批判するがそれでどうにかなるものではなかった。球場に行けばそれでブーイングだった。
井上はそれにより不機嫌になる一方だった。社内にも毎日抗議の電話が届く。そして発行部数も見る見るうちに低下していった。
「売り上げを伸ばせ！」
「やっているのですが」
「それでも」
「俺に逆らうっていうのか愚民共が！」
井上は社長室で忌々しげに吠えた。
「朝売を買わないで何処の新聞を買うんだ！」
「どうも何処の新聞も取らない人間が増えているようです」
「どうやら」

「何っ！？」
悪い意味で根っからの新聞人である井上にこれはわからないことだった、
「新聞を取らない奴がいるのか」
「最近はネットで情報を手に入れているようです」
「そして携帯で」
「そうなのかよ」
井上はそれを聞いて唖然とした顔になった。信じられないというのだ。
「ネットや携帯でかよ」
「そうです」
「それで新聞はもう」
「じゃあそっちを叩け」
井上はすぐに今度の攻撃の矛先を決めたのだった。
「ネットをだ。いいな」
「ネットをですか」
「ああ、叩け」
彼は言うのだった。
「それで政治家にも話をやって規制にもっていけ。いいな」
「政治家にですか」
「官僚にもだ」
井上はさらに命じた。
「いいな、ネットを規制すればそれで新聞に戻るんだ」
「そうですね」
「何しろ新聞、それにテレビなくして愚民が生きていける筈がありません」
流石は井上の取り巻き達だった。極めて下劣な思想の持ち主達である。

第五章

「だからこそです」
「ここは我が朝売の総力を挙げて」
「ネットを潰しましょう」
こう言って彼等は早速大々的にネットへの規制に乗り出した。しかしそれに乗った政治家も官僚も少なかった。彼等も既にネットで情報を手に入れていてそこから朝売の現状もこれまでの嘘も知ってしまったのだ。もっと言えば信用を失ってしまっていたのだ。
「もうあの新聞は駄目だ」
「嘘ばかりついていたのがばれた」
「脅迫してきたら公に出せ」
「ネットに流せばいい」
乗る人間は少なく乗った人間はネットで叩かれる始末だった。中にはブログに批判記事が殺到しそのブログを閉鎖するしかなくなった議員までいた。
そして挙句にはネット規制の後ろに井上がいることもわかった。それによりネットでの彼への批判、それに朝売不買運動は頂点に達した。
「駄目です、もう」
「発行部数の低下は底を割りました」
「テレビの視聴率も全てドン底です」
「チームの観客動員数も水増ししても最早」
「どういうことなんだ」
井上は取り巻き達の報告に苛立つばかりであった。
「何故どいつもこいつも」
「わかりません」
「ネットの勢いは止められません」
「ネットが何だっていうんだ」

井上は歯軋りしながら呻く様に呟いた。
「規制に乗り出してるのに全然利かなねえしな」
「発行部数は何とか止めたいのですが」
「どうしましょう」
「しかもです」
まだあるのだった。井上にとって忌々しいニュースは。
「広告も次々に撤退していっています」
「新聞の広告もか」
「はい、それもです」
「そちらも歯止めが効きません」
「政府に言えっ」
怒鳴り声に近かった。
「新聞を支援しろとな。このままでは本当にまずいぞ」
「え、ええ」
「それでは」
「新聞は絶対だ」
井上の目は最早血走ったものになっていた。
「俺の朝売、絶対に潰させんぞ」
こうして彼は最後の手段とばかりに政府に支援を要請した。しかしこれもまた彼等に対する集中豪雨的な批判になるのだった。
「はあ！？政府に支援要請！？」
「金出せってか」
「どっかの銀行への支援とどう違うんだよ」
誰もがこれには呆れ果ててしまった。
「おい、政治家に働きかけるか」
「朝売の前でデモやるか」
「賛成する政治家いたらリスト作れ」
今回もネットにおいて対策が講じられていった。
「ビラ作ってわざとどっかに置いておいてな」
「海外にも広めるか」

「どんどんやってやれ」
こうして次々に作戦が講じられ実行に移されていく。政治家はおろか広告を出している企業にまで電話やメールが入れられ送られる。そうして遂にこの支援の話も潰れた。発行部数はさらに激減し遂に朝売は悪夢とも言うべき大赤字に陥ってしまったのであった。
「最早これでは」
「破産申請するしか」
相変わらず朝売には抗議の電話が連日連夜鳴り響いている。最早それで仕事にならない程である。朝売新聞は今まさに崩壊しようとしていた。
「どうしようもありません」
「我が社はもう」
「おのれ、何故だ」
井上もまた憔悴しきっていた。その痩せこけた顔で言うのだった。
「何故こうなったんだ」
呻いていた。
「新聞は絶対の権力だった筈なのに」
そう呻く彼の後ろの窓から見えるのは今日も会社の巨大なビルの前に集まる群衆だった。彼等は口々に叫んでいた。
「破産したそうだな！」
「自業自得だ！」
「そのまま潰れろ！」
「地獄に落ちろ井上！」
彼等は垂れ幕や抗議のプラカードを持って口々に叫んでいた。
「自分が一番偉いと思っていたからだ！」
「俺達を馬鹿にするな！」
だがその声はもう井上の耳には届かなかった。彼は憔悴のあまり空虚な抜け殻になってしまっていた。間も無く朝売新聞社は破産申請手続きに入り遂に倒産してしまった。
井上は失意のうちに死んだ。その時日本中が祝杯をあげ葬式場の

前では大歓声が起こった。その時蓄財や汚職、工作の数々も公になり今度は朝売新聞社に地検から強制捜査まで入った。その時国民はわかったのだった。本当の腐敗とは何であるのかを。

腐敗　　完

２００９・８・２６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5047i/

腐敗

2010年10月8日15時26分発行